地域づくり表彰

アカリノワ
（静岡県静岡市）

竹あかり灯す　アカリノワ

～　豊かな自然環境を　未来の世代へ　～

アカリノワ

代表

大村（おおむら）　大輔（だいすけ）

１．静岡市の概要

静岡市は、首都圏と中京圏の中央に位置し、東名高速道路や東海道新幹線など交通の利便性を活かした人・モノの流れが盛んな都市です。

空から眺める静岡市

また、標高 3,000m級の南アルプスから水深約 2,500mの駿河湾へと繋がる世界でも極めて珍しい高低差約 5,500mという自然環境を有しています。

南アルプスに生息するライチョウ

そして、古くから今川氏や徳川家康公の城下町として、独自の文化や産業を育み、日本の中枢都市として発展を続けてきました。

国宝・久能山東照宮

２．活動開始の背景・経緯

当会の活動拠点は、静岡市葵区の北に位置する麻機地区となります。この地区には、自然再生推進法事業地・麻機遊水地があり、貴重な植物・鳥・昆虫が生息するなど、日本有数の自然環境を有しています。しかしながら、この地区では、山々で点在する放置竹林が大きな課題となっていました。

そこで、「アカリノワ」は、放置竹林の解消に向け、多様な主体との連携のもと、竹林伐採に取り組むとともに、伐採した竹を地域資源として有効に活用していくことで、豊かな自然環境を未来の世代へ継承していくための取組を始めました。

麻機遊水地

３．活動の広がり

もともと、当会の活動のきっかけは、地域の保護者の「子どもに外で遊んで欲しいけど遊ぶ場所がない」という声からでした。このため、自然を体感できる「里地・里山体験」を実施し、放置竹林問題を通じて、子ども達の自然環境の保全に対する意識の醸成と、地域に対する愛着を育む活動を始めました。

そして、当会の活動を知った先生などから教育の一環として実施できないかという相談を受け、複数の学校で同様の取組を行い、地域から市域へ活動の輪を広げました。

また、市域内にとどまらず、周辺の自治体からも同様の相談があったため、各地域において地域住民を対象にフィールドワークを実施するなど、保護者の声から地域へ、地域から市域へ、市域から他都市へと活動の輪を広げていきました。

里地・里山体験

４．継続性

継続した取組を担保していくためには、放置竹林問題を自らの問題と捉えていただく必要があります。

このため、竹林の伐採、イベントを彩る竹灯籠の作成、田畑の肥料としての活用など一連の作業を体感するプログラムを作成しました。

このプログラムは、フィールドワークを通したイベントを中心に、参加者同士が普段体験できない活動を通して、楽しみながら通年で継続して実施できるよう工夫しました。

循環型農業へのチャレンジ

また、活動していくためには費用が発生しますが、ボランティアだけでは継続した活動ができないため、企業主催のイベント業務を受託し収益を得ることで当会の活動の継続性を担保しています。加えて、当会のスタッフは、一次産業に従事する者も多く、天候等により収益が不安定となるため、当会の活動を通しスタッフの収入も維持することで、人材確保にも努めています。

５．地域資源の活用

従来、伐採した竹は、そのほとんどが山で野積みされていました。この竹を地域資源として活用するため、竹灯籠を制作しイベントなどで展示することで、幻想的な空間を演出し新たな魅力づくりの一つとして役立てています。

静岡浅間神社の竹灯籠

また、竹灯籠を焼却処分するだけでは、二酸化炭素を排出するだけでなく、最後まで資源として活用できません。そこで、竹灯籠を竹炭にして二酸化炭素を固定化するとともに、田畑の肥料として活用することで土壌改良にも役立てています。

親子で田んぼプロジェクト

６．創意工夫

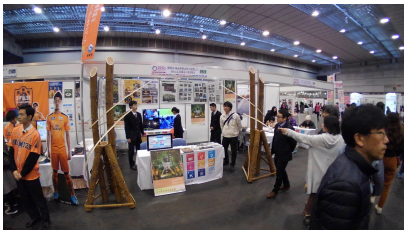
活動当初の竹灯籠は、竹に穴をあけて灯りをともしていただけなので、足を止めて見ていただくことができませんでした。このような、ニーズの無い竹灯籠では、活動の輪を広げることができないと思いました。

そこで、人を感動させる芸術について学び、本業の測量技術を応用した緩和曲線・数列を用いて美しさを探求し、学校や企業から声がかかるようになりました。

ランプシェード

また、当会は活動当初より、自然環境の保全だけではなく、地域社会への貢献についても同時に進めていましたが、活動内容を体系立てて発信することができていませんでした。

このような中、活動拠点である静岡市では、SDGs を強力に推進していたため、当会の活動内容も SDGs のゴールに紐づけ、経済・社会・環境の三側面を統合的に解決するための手段として発信することで、当会の活動自体にも新たな価値を創出しました。



SDGs コレクション

７．成果

活動当初は、地域の声から始めた活動であり、イベント参加者も 100 人を超える程度でした。しかしながら、活動を続けていくことで市域内外の自治体・民間企業などとの繋がりが生まれ、令和元年度には 12,000 人以上もの集客のあるイベントに携われるようになりました。

また、各自治体での取組は、行政主体ではなく地域主体で継続した活動が行われるなど、当会が「伝え手」となり各地域の特色を活かした取り組みが進められています。

田沼再興の竹あかり

また、当会は、民間企業など多くの主体との連携を図るだけでなく、地域の新たな魅力を創出してきました。特に、日本夜景遺産に認定された日本平では、夜景を楽しむのと同時に、竹灯籠の幻想的な世界を演出し、来訪された方々に非日常を味わっていただくことができました。

加えて、国宝久能山東照宮では、夜間イベントを開催したことがありませんでしたが、「天下泰平の竹あかり」と銘打ち、竹灯籠を展示することで、国宝久能山東照宮の新たな魅力発信にも繋げました。

日本平でのイベント風景

天下泰平の竹あかり

８．課題と展望

有難いことに各方面から相談や依頼が増えるなか、最優先の課題として竹あかり職人の育成が挙げられます。竹あかり職人とはいっても、伐採～加工～設置までを担うため、現場に応じた対応能力が求められます。今後は、より多くの皆さんに感動を与えられるよう、職人のスキルと作品のクオリティーを高める取組を行っていきます。

また、「土に返す」までがアカリノワの竹あかりのため、自然界の循環作用まで網羅していく必要があります。今後は、SDGs「持続可能な開発目標」も踏まえ、放置竹林問題にとどまらず、水素を活用した「水素で灯す竹あかり」を実施するなど多角的な取組も行っていきます。

当会は、これからも、竹あかり循環の一部でもある炭作り、野菜作りなどの体験を通し、消費するだけの人生から、あらゆる分野で生産・創造できる豊かな人材を育んでいける環境を作っていきます。

当会のスタッフ